

## 平成26年度東北芸術工科大学卒業・修了式祝辞

2015年3月21日  
京都造形芸術大学学長 尾池和夫

本日、東北芸術工科大学大学院を修了され修士の学位を授与された46名の皆さん、大学を卒業して学士の学位を得られた497名の皆さん、おめでとうございます。この日まで、支援してこられたご家族の皆さま、まことにありがとうございます。

東北芸術工科大学の創設者で前理事長の徳山詳直さんは、2012年2月25日に発行された著書『藝術立国』の【十九章】「東日本大震災からの回復を祈って」の中で次のように言っています。

「この本は、前の章で終えるはずでした」として、「東北芸術工科大学ではすべての学生の安否確認に全力をあげて、全員の無事が確認されたときには事務室に拍手がわき起こりました。しかし学生の中にも、また職員の中にも、家族や家を失った人達があります。命が無事であった学生でも、百名以上が大学に出てくることができないほど、大きな打撃をうけています」と続け、卒業・修了式は延期し、入学式も日程を遅らせる決断をしたことが詳しく述べられ、そして、「決して絶望しないでください。そして、最大の努力を払ったうえで、なお問題を解決できないときには、大学に連絡をしてください。大学は、全力をあげて卒業生・修了生諸君を支援します」と書いています。これを書いた徳山詳直さんは昨年亡くなりましたが、この言葉は永遠に生きており、今日、卒業・修了式を迎えた皆さんにも、そのまま伝えられるべき言葉であります。そこに、大学の存在意義があるのです。

入学の直前に大震災を経験した皆さんが在学中に、さまざまの復興支援活動が行われました。津波をかぶった資料のクリーニングには、東北芸術工科大学、山形大学、米沢女子短期大学などを拠点に、4年間で延べ5000人ほどが関わり、3000点以上のクリーニングが行われました。それでも、まだ数千点が残っているとされます。

「START Tohoku」という学生団体は、2011年11月から、東北芸術工科大学と山形大学の学生が中心となって、宮城県石巻市のことぶき町商店街と活動しました。私もつい先日、石巻の日和山から町を見ていました。大学生に何ができるかという問いに、石巻の人たちは、「住民ではない、一歩引いた視点から石巻を見つめられるあなただからこそできる支援がある」と声を掛けてくれると聞きました。JR石巻線は今朝、全線で運行を再開しました。

この4年間に、東日本大震災の記録映画と関連する情報を集めて保存するプロジェクト「311ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ」が山形にあり、作品が視聴できるように保存されています。その中には、最上町で開かれた復興支援ライブを福島県南相馬市出身の

東北芸術工科大学生が記録した「まけないタオル 復興コンサート」も入っています。1933年の昭和三陸津波の直後、「津浪と人間」の中で、寺田寅彦は、「人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう」と書いています。この山形のアーカイブも今後とも大いに活用されることを願っています。

卒業・修了研究・制作展では、巨大なジンベエザメなど約600の作品が並ぶ中で、久松知子さんの「日本の美術を埋葬する」が第7回絹谷（きぬたに）幸二賞の奨励賞を受けて全国的な話題になりました。平山郁夫さんが生前「肖像画は似ていないと意味がないでしょう」と私に語ったときの声が聞こえてきました。

プロダクトデザイン学科の石川響さんは、透明なアクリルの棒による椅子を制作しました。私は残念ながらまだ座ってみる機会を持っていないのですが、ウェブサイトの「触れそうで触れなかったり、角度を変えると新しい発見があったり、しゃがんでみるとかっこよかったり、ついつい摘んでみたり・・・」という紹介をととても好ましく拝見しました。

卒業・修了研究・制作展にみごとに現れているように、この東北芸術工科大学は、芸術とデザインを基本に、科学と技術と学術と芸術という人類の基本に触れることのできる貴重な存在の大学です。その大学で身につけられた力を大いに発揮して、進学しあるいは社会に出て、明日からその威力を具体化してくださるよう祈りつつ、私のお祝いの言葉いたします。

もう一度、修了、ご卒業、まことにめでとうございます。  
ありがとうございました。